强學會紀事

——汪康年傳稿之二——

内藤戊申

變法自强の論を天下に廣めたのは一八九六年八月（舊曆七月。以下月日は太陽曆による）上海で發刊された「時務報」であつたが、それより一年前の九五年八月北京において强學會という學會が組織された。この强學會こそは日清戰爭後最初に結集された革新運動であつて、その後の諸報紙の發刊、學堂・學會の群生[1]の先驅をなすものであつた。强學會はまず北京で發會し、ついで上海にも設けられ、機關紙として日刊の「中外紀聞」と「强學報」とを發刊した。ところが翌一八九六年一月には早くも强學會は禁止され、機關誌も停刊した。そして同年八月に「時務報」が創刊されたのだが、時務報館は殘つていた强學會の資金を使つて設立された。かつまたその創立者である汪康年は上海强學會の入會者だつた。[2]世間では「時務報」は「强學報」の後身だと思つていたようである。こういう關係だからこの際强學會のことを調べ、さらにはそれ以前からあつた廣學會にもふれてみたい。

廣學會　一八八七年に英・米・獨のキリスト教宣教師たちが上海に廣學會なるものを作つた。その目的は中國の人士を啓蒙するためにキリスト教の教義書のほかに自然科學や政治經濟の洋書を飜譯出版するにあつた。この會をはじめたのはウイリアムソン韋廉臣という、上海にいた宣教師だが、彼はこの年スコットランドのグラスゴーで解散した聖教書會の印刷機械を贈られたのでこの仕事に着手したのだつた。[3]これよりさき上海の米人宣教師ヤング・アレン林樂知等は一八六八年より「教會新聞」という週刊誌を出

していたが、宗教專門誌であるため賣行きが惡く一八七二年停刊した。一八八七年廣學會發會とともにこの新聞は月刊誌として復活し、一八八九年には「萬國公報」と改名され、その內容も傳道記事のほかに、歷史・地理・社會・風俗の記事をも載せることにした。この雜誌は一九〇六年アレンが死ぬ時まで續いた。この雜誌は發行部數四千にも及んだというが、[4] それは恐らく小野川氏[5]が「日淸戰爭が起ると共に、その戰爭に關する論說・記事が信賴すべきことによつて注目され、……光緖二十年（一八九四）萬國公報の賣行は二倍となり……再版を刷らねばならなかつた」といつている時期のことを指すものだろう。廣學會はもちろん雜誌「萬國公報」のほかに數百種の單行本を出版した。日淸戰爭からは特に時務關係の書に力を入れたらしく、ティモシー・リチャード李提摩太の「泰西新史攬要」「時事新論」やアレンの「中東戰紀本末」「文學興國策」などは非常に賣れ、ついには上海道臺から發禁を食つたが私版が橫行するほどだつた。[6] 廣學會の仕事が丁度時宜に際會したわけだが、しかしそればかりでなく變法運動に廣學會が貢獻したことについてはリチャードの偉さが大いに與つている。いつたいプロテスタントの中國布敎は歷史が淺く、一九世紀初にモリソンがはじめて來華したにすぎない。その上英米などの母國はフランスのように傳道に熱心でなかつたので新敎の信者獲得はなかなか捗らなかつた。そこで宣敎師たちはむかし天主敎宣敎師たちがやつたように敎育傳道、醫療傳道によつて中國人に浸透しようと努めた。リチャードは敎育傳道者の代表的人物だつたわけである。彼のような傑物は「ただ一人しか出なかつた」と「西洋文化の支那侵略史」の著者ヒューズはいつている（魚返譯本。九六頁）。單なる宣敎師の域を脫して、彼は中國近代化への指導者にまでのし上つたのであつた。范文瀾の「中國近代史」（三〇九頁）は彼の活躍を次のように記している。

甲午戰爭中、親露派の西太后、李鴻章は親英派の光緖帝、翁同龢を壓迫し、親英派は失敗した。廣學會は親英派が屈服に甘んじていないのを見て、變法を勸告するよいチャンスだと考えた。そこで一八九五年リチャードを北京に派遣して要路の大臣に會見せしめ、かつ光緖帝に長文の「新政策」一篇を進呈させた。……光緖帝はこのような新政策の可否がよく分らなかつたが、帝の側近である

翁同龢・孫家鼐（ともに帝の師傅）や文廷式（帝の二妃の師）らはリチャードの勸告を受けて時務書を讀みはじめ變法に傾いた。リチャードが上海から北京に上京したのは一八九五年の何月のことかはつきりは分らないが七・八月ごろ[7]ではないかと思われる。强學會が創立されたのが八月で、九、十月には立役者の康有爲は南京上海へ出かけているので、その間リチャードは梁啓超を自分の個人秘書として强學會をリードしていたらしい。强學會が一八九六年一月には封禁され、變法の時期未だしとみてリチャードは二月ごろ上海に引き上げた[7]。范文瀾氏は「强學會の支持者は翁同龢・孫家鼐であり、指導者はリチャードである。リチャードは書局・學會の名を借りて、じつは英米を背景として帝政黨（西太后派）に對してを組織せしめた」のだときめつけている。露佛獨の三國干涉は親露派の勝利を意味するから、これに對する英米の動きの一つの表われがリチャードの行動だつたのだという見方もできる。廣學會の會長は海關總稅務司ロバート・ハート、幹部には英米獨の總領事、稅務司、實業家が名を列ね[8]、單なる傳道機關ではなかつたのである。

强學會　强學會創立の詳しいいきさつはよく分らない。諸書の記事を照合してみるとおよそ次のようなことになるかと思われる。

一八九五年三月七日康有爲は弟子の梁啓超を伴つて北京に上京した。それは日淸戰爭の敗戰の報が次々にもたらされる最中だつた。すなわち一月足らずまえの二月十二日には山東半島の威海衞が陷落し、李鴻章御自慢の北洋艦隊は全滅し、名將丁汝昌は自殺した。日本軍は山東作戰を完了し、渤海灣の制海權を完全に握つた。一方朝鮮滿州の陸戰ではすでに平壤に破れ、旅順を失つている淸軍は遼河の線で日本軍を食いとめようとして大軍を投入し、最後の努力を傾けたのだが、三月四日に牛莊、七日に營口、十日に田庄臺という風に遼河下流の重要地點が全部陷落し、日本軍は遼河平野を平定してしまつた。海軍は全滅し、陸軍の方も最も精鋭だとされていた淮軍や湘軍が負けてしまつたので淸國がわでは北京を守る自信がなくなつてしまつたわけである。考えられる方策は二つあつた。一つは一時都を奧地へ遷し、早急に變法自强策を實行して挽回をはかること、もう一つは北京陷落以前に媾和することであつた。主

戰派や康有爲などは前者を主張したが、西太后は結局後者を選んだ。日本軍は戰線を擴大し過ぎて力を出し切っていたし、軍費の方も底をついていたのだし、四月十七日の馬關條約調印のわずか三日後に三國干渉が行われたことでもあり、結果的にみれば媾和はそんなに惡い處置でもなかったといえるのだが、進歩的な知識人にはとにかく媾和が氣に入らなかったのである。

上京した康有爲は六月三十日の第四上書までは光緒帝を動かして朝議を變法の方向へもってゆくことに主力を傾けたようである。しかし二十五才の光緒帝は新知識の書物を愛讀はしたが、まだ變法にふみきるところまではいかず、またそれを實行するだけの實權もなかった。康有爲は若い皇帝を動かすことを一時諦めて官僚と知識人の啓蒙に方針を切りかえざるをえなかったのではあるまいか。それはともかく彼はこの期間に三つの上書を奉っている。五月二日には有名な公車上書を、六月二日に第三上書を、六月三十日に第四上書。公車上書は十八省千二百餘人の擧人の連名で(但し今日殘っている題名には六〇三人の名前しかない)行われた。この年の四月に會試が行われ、康有爲もこの時進士に及第したのだが、その會試に應ずるために全國の擧人が北京に集っていたので、四月十五日に馬關條約締結の電報が北京に着くと康有爲は直ぐに梁啓超に命じて北京にいる擧人たちの署名を集めさせたのである。[9]

啓蒙運動の手はじめとして康有爲はまず日刊の新聞を發刊した。この新聞はじめ「萬國公報」と稱し、のちに「中外紀聞」と改名した。「小野川書」一八二頁によれば、廣學會の「萬國公報」とまぎらわしいからというのでリチャードのすすめで改名したのだというから、その時期はリチャードの上京以後ということになろうが、そのリチャードの上京の時がはっきりしない。また民國初年の梁啓超の演說[10]の中にこの新聞のことを「中外公報」とも呼んでいる。發刊の日付も分らない。「康南海自編年譜」叢刊戊戌四・一三四頁に從って舊曆六月としておく。刊行の費用は康有爲の自辨で、しかも無料で配達したのだから、陳熾戶部郎中、庸書の著者や張權張之洞の子が援助してくれたが足らず、舊曆八月の節季勘定を拂う時期には衣服を全部質入れして溜つた借金を拂ったという。當時北京には印刷機械がなく、またそれを購う金もなかったので、「京報」[11]發賣所にたのんで粗末な木活字印刷で印刷

させ、京報といつしよに貴人や士大夫の家に配達してもらつた。發行部數は上記梁啓超によれば、はじめは二千部だつたのが一月餘の後には三千部となつた。[12] 記事は廣學會の雜誌から轉載するもの以外には數百字の短かい論說が一篇あつた（湯論叢二二八頁）だけで、これは梁啓超と麥孟華[13]が毎日書いた。この新聞は北京の人士に對してある程度啓蒙の役目を果したことと思われるが、同時に保守的な官僚たちの反感をも買つた。それが京報の發行者にひびいて、のちには配達してくれなくなつた（梁啓超演說）。梁啓超はしかし、この經驗に味をしめてジャーナリストとして身を立てようと決心したらしく、翌年「時務報」創辦の下地はこの時に培われたようである。科學に落第した彼がついに進士になることを斷念したのもこの頃からかもしれない。「中外紀聞」は一八九六年一月二一日（光緒二一年十二月七日）強學會が封禁されると同時に停刊した。「政變記」（一二六頁）によれば當時北京には報（新聞雜誌）を爲る者も會學會を爲る者もなかつたのだが、康有爲がこれを創めたのだとある。[14]

新聞創刊後まもなく康有爲は中國で最初の學會である強學會を北京において組織することに成功した。清朝では政治結社は禁じられていたので學會という形式をとつたものだが、實質的にはそれは一種の政黨であつた。北京では保守派の力が強く會の發展は困難であることを感じた康有爲は次で上海に強學會をつくり、江南の進步的人士を糾合した。強學會は御史楊崇伊の彈劾を被り、わずか四ケ月ほどで禁止されたが一時はいわば全中國の革新分子を一つに組織した大運動であつた。蔡爾康[15]が「これまことに中國非常の盛擧なり」と稱揚したほどであつた。強學會の具體的な目標は、はじめ北京では世界の情勢を知らしめるための圖書館と新聞社の創設であつたが、上海強學會では次の五項目になつた。一、日本や西洋の書籍の飜譯。二、新聞發行。三、圖書館開設。四、博物儀器院開設。五、政治學校設立（政變記一二七頁）。このうち飜譯・新聞・學校にかんしては強學會のあとに次々と實現していつたわけである。

北京强學會　この會の發會が正確に何時だつたかはよく分らない。「康南海自編年譜」（叢刊戊戌四・一三四頁）に、一八九五年七月初（舊曆。新曆八月二十日頃。）に康有爲と陳熾とが客を集め、出席者から數千金の義捐金を得た。陳熾を提調に擧げた云々とあるのが發會式に當るものと思われる。康有爲は多くの人を

集めて、京師において會をつくることの必要ははじめから考えていたが、報紙をもつて宣傳したのち開會した方がよいと陳熾に忠告されたのでそれに從つた。新聞を創めて二ケ月、輿論も漸くついてくるようになり、話の分る者が次第に多くなつたので、人を集めて宴會を張り、開會を成立させようとしたが、三度も失敗した。ただ陳熾と沈曾植子培だけはいつも贊成してくれた、と自編年譜に述懷している。結局三回失敗したのち七月初にやつと開會に漕ぎつけたものと思われる。この發會式の日に袁世凱・楊鋭・丁玄鈞・沈曾植・沈曾桐字子封。翰林院編修・張孝謙・陳某はその場で醵金の約束をして數千金が集つた。陳熾を提調事務局長の如きもの に擧げ、張孝謙[15]をその補佐とした。康有爲は序文と章程[16]を起草した。これより三日に一度、炸子橋の崇雲草堂に會合を開き、來者は日に多くなつたとある。また書店の翰文齋が群書を寄附したいといつたので、琉璃廠の中に書藏文庫を設け、麥孟華を上海に派して飜譯書を購入させたりした。この時北京には世界地圖の一枚もなかつたのでわざわざ上海で苦心して一枚の世界地圖[17]を探して購つてきたところが會員は熱心にみたという。その後英米の公使が洋書や圖器を寄附してくれたりして會の規模は日に廣くなつた。そこで劉坤一兩江總督・張之洞湖廣總督・王文韶直隸總督らに手紙を送つて各五千金を、宋慶・聶士成からも數千金を得、會員はますます多く千人ほどになつた以上自編年譜。會が盛になると同時に保守派の反撥もしだいに具體化してきた。徐桐[18]協辨大學士吏部尚書や御史の褚成博が彈劾の上奏をしようとしていることを陳熾と沈子培が知らせてくれ、危いから早く離京するように康有爲にすすめた。陳・沈の二人は終始康有爲の助力者だつた。康有爲は上海でも强學會を開く目的もあつて、後事を梁啓超に託して十月十七日舊八月二九日に北京を立つて天津から上海に向つた。

「湯論叢」三一頁や「范近代史」二二七頁には發會の際のことを「文廷式が出面音頭を取ることして會を組織した」といつているし、湯論叢一六頁は「强學會的發起人」といういい方をしている。ところが康有爲や梁啓超の書いたものには**文廷式**の名は出てこない。張元濟の「戊戌政變的回憶」叢刊戊戌四・三二三頁にも度々集つた人の名の最初に文廷式を擧げ、かつその時には康有爲は北京にいなかつたといつている。張元濟が出席したのは康有爲の出京後だつたのかもしれない。

そのばあいにも文廷式を擧げているとすれば、文廷式は始終顏を出していたものと推測される。發會の際も多分文廷式が會長格であつたのだろうと思われる。にも拘らず康・梁ともに文廷式の名をいわないのには何か理由があるのではないか。一八九六年一月二一日（舊曆十二月七日）に楊崇伊の强學會彈劾が行われて强學會は封禁され、翌年三月三十日（舊二月十七日）に文廷式は「革職、永不叙用、並驅逐回籍、不准在京」つまり免職、首都追放の處罰を受けている（東華續錄。一三二）。罰を受けたのは文廷式だけである。この間の事情を明かにする資料がないのでこれは一つの疑問として保留するよりしかたがない。御史楊崇伊は李鴻章の親類で、この彈劾も李の意を受けて行つたという（湯論叢一六頁）が、李鴻章が何故文廷式だけを目の敵にしたのかよくわからない。ともかく文廷式は中心人物の一人だつたと思われる。北京强學會の構成分子の中心は康有爲・梁啓超一派と文廷式・陳熾・沈子培などの進步的北京官僚とリチャードなどの外人と三つに大別し得ると思う。日清戰爭の後半から主戰派と主和派に分れて大論爭を展開した。廷臣たちは以前から后黨（西太后派）と帝黨（光緒帝派）とに二分されていたが、后黨は主和派、帝黨は主戰派であつた。そして結局主和派が勝つたわけだ。主戰派の領袖は翁同龢や李鴻藻などで、ことに翁同龢は光緒帝の師傅だつた關係で帝黨の中心でもあつた。文廷式は光緒帝の愛妾瑾妃珍妃の師であり、その關係で翰林侍讀學士に異例の出世をした人物だからむろん帝黨であり、主戰派だつた。日清媾和の議において敗れた帝黨・主戰派が挽回の活路を變法自强策にもとめた心理は容易に想像できる。すなわち康有爲一派の主戰・變法派と結びつく所以である。しかし康有爲一派の運動がなくても、その黨派的對立事情からして反西太后的、反李鴻章的な、かつ改革的な一グループを形成すべき勢ではあつたのである。もつとも保守派の强い北京にあつてはその活動の程度、思想の程度には自ら限界があつたにちがいないが。康有爲が上海へ立つた十月十七日以後も强學會の會合は行われていたようだが、若い梁啓超と麥孟華だけで集會がうまくいくとは考えられないから、やはり文廷式あたりが中心になつていたのではないかと思う。

北京の官僚の話になつたついでに注目しておきたいのは**翁同龢**のことである。彼は帝黨・主戰派の旗頭ではあつた

が、がんらい保守的思想の持主であつた。それが強學會の刺戟などによつて變法自強論をよく讀んで改革論者になり、はては二年後の戊戌變法の推進者になつた。康有爲を光緒帝に推擧したのは彼であつたから、康有爲の自編年譜や梁啓超の「政變記」には翁同龢のことは彼等のパトロンとしてよく書かれている。矢野仁一博士は「清朝末史研究」に「翁同龢と康有爲」という一節を設けて

かれは實に康有爲のために、光緒帝に接近する機會を作つたもので、かれのことがなかつたならば、戊戌の變法のやうな政治改革も起らず、したがつて戊戌の政變も起らなかつたであろうと思はれる。一二頁

とまで書いている。また譚嗣同の上歐陽瓣疆書の一つに、

康長素有爲倡えて强學會を作り、之を主る者、內に常熟翁同龢あり、外に南皮張之洞あり、名士の會する者千ばかり、款を集むること亦數萬。……譚全集三三四頁

という言葉があり、翁の後援がいかに有力視されたかを物語つている。翁は軍機大臣であるほかに毓慶宮行走光緒帝學問所勤務であつたから、ここで帝と二人きりで話をする特權を持ており軍機大臣の中でも特別の發言力を持つていた[21]のである。翁同龢と强學會の關係はどの程度のものであつたかよく分らない。「叢刊戊戌」一に抄錄されている「翁文恭公日記」をみても康有爲や强學會の文字はほとんど出てこないところをみると、少くともはじめのうちは世間で思つていたほどには關係がなかつたのかもしれない。强學會の會合に出席したことなどはまずなかつたものと思われる。寄附金を出したかどうかも疑問である。ただ彼は戶部尚書だつたので、戶部の豫算の一部を會に支出したり、印刷機械を分けてやつたりしたと蔡爾康はいつている・叢刊戊戌四。三八六頁翁同龢については彼の强學會に對する支援よりはむしろ强學會の彼に對する影響の方を重視すべきであろう。

一八九六年一月二一日に强學會は禁ぜられ、三月二九日に文廷式處罰の上諭が下り、同時に翁同龢の光緒帝と獨見する特權も奪われ、朝廷における進步的勢力は一時西太后派に屈することになつた。「ここにおいて開新の風は地を掃えり」と康有爲は歎じている自編年譜。この時期から舞臺は上海にうつるわけであるが、北京强學會の後日譚を少しつけ加えておこう。まず、十日ごとに行われていたという集會はどうなつただろうか。「知新報」第二十冊光緒二三年五月一日

の「學會彬彬」叢刊戊戌四・三八一という記事を引こう。

京師の强學會の封禁以後、一、二の有志の士が小會と倡えて數日に一度、陶然亭や棗花寺などに集つて研究會をやつていた。のち官書局が再開されてもこの會はそれとは別に行われ、熱心に實學を研究していた。近ごろきくところでは集る者はしだいに衆く數十人になり、資を集めて琉璃廠の中の立派な家を賃借しているそうだ。總理衙門の文書係で人を公選するので、會では西文に通ずる者數人を招いて、毎日九時から三時まで會員は勉强して他日に期している。會中に常住している人は刑部主事の張元濟菊生だそうだ。

張元濟はいうまでもなく强學會の有力な會員だつた人である。また强學會は洋書の譯書や儀器などを集めていた。强學會の書籍その他は一月二十一日の封禁とともに步軍統領警察に持ち去られたが、封禁後まもなく二月五日に帝黨の御史胡孚宸が洋書の必要を說き、官辨の書局として復活して欲しいという上奏を行つた。そして三月五日に總理衙門が胡孚宸の上奏のようにさして頂きたいと願い出たのでこの奏議は容れられ、强學書局を改めて**官書局**とし、西書の購入、書籍・新報の飜譯と出版を行うこととし、月に千兩の豫算を計上して工部尚書の孫家鼐を派して管理さすことになつた東華續錄一三二。このことはいわば翁同龢一派の捲き返しがやや成功したことを意味する。この官書局は擴充されて一八九八年京師大學堂となる。のちの北京大學の前身である梁啓超演說。叢刊戊戌四・二五五頁。以上は「湯論叢」二二八・二三〇頁の記事を少し詳しく調べてみたものである。

終りに北京における會の名について一言しておこう。强學會という名稱のほかに强學書局または强學會書局という名がある。「報學史」一二一頁によればはじめ强學會といい、中途で强學會書局と改めたという。寄附金が集つて上海から數十種の書籍を購入して來たので、北京の後孫公園に會所を設けたとあるから、ここを圖書館兼出版所とするつもりで書局の名をつけたのではないかと思う。張元濟の回憶談叢刊戊戌四・三二三頁によれば十日ごとの集會にはべつに會の名はなかつたというから、世間ではこの會所の名が强學會だと思つていたのだと思う。文獻によつては强學書局卽强學會也といういい方をしているものがあるのはこのためであろう。しかし會の當事者たちは强學會は學會の名稱だと考え

ていたようだ。文獻（蔡爾康文。叢刊戊戌四・三八六頁）によつては強學會はべつに強學書局を附設していたと明記している。強學會の名が何時からはつきり用いられたかは康有爲の自編年譜や梁啓超の「政變記」などをみてもよく分らない。

上海強學會　一八九五年十月十七日（舊曆八月二九日）康有爲は北京を離れ、十九日天津に着き、三日間山海關の防備を視察し、二九日上海に着いた。前述のごとく北京ではようやく身邊が危險になつてきたことと、強學會を上海にもつくり、中支南支の人士を糾合して全國的運動にまで盛り上げようという目的があつたからである。彼はまず張之洞を抱きこもうと思つたので上海からすぐに江寧（南京）へ出かけた。兩江總督兼江寧將軍の劉坤一が母の喪に服する一年餘の間、張之洞は劉の職を代行することになり南京に來ていたのである。康有爲は二十餘日間南京に滯つて、隔日に一度づつ深夜に至るまで張之洞と會談した。強學會開設の說得には成功したが、康の說く孔子改制論には贊成されないばかりかこういう考えを發表してはいけないと勸告された。ともかく南京では事は大いに順調に運んだ（自編年譜）。そこで康有爲は上海にもどつて會を開くことにした。會の序文（叢刊戊戌四・三八九頁）は張之洞の名儀で康有爲が草し、章程（叢刊戊戌四・三八五頁）は黃紹箕と梁鼎芬が作つた（自編年譜）。會員を募集したところ十六人が入會し（黃傳）、遠方から數人の贊助を得た。會員中に汪康年も名を列ねている。張之洞はこの頃すでに北京の宮廷における彈壓の空氣を察知していたので、千五百兩の寄附はしたが、康有爲と學說が合わないからとか、群才が集つたのだから自分は名を列ねるには及ぶまいとて入會を斷つた。さらにのちには會を止めよと電報で勸告してきたが康有爲は「會章大いに行わる。中止する能わず」と返事をした（自編年譜・張年譜）。上海の張園のそばの家を借りて開會したところ遠近響應したが江寧（張之洞の所）からは誰も（梁鼎芬などを指す）來なかつた。このように方々からの掣肘があつたのだから楊崇伊の劾奏がなくても會はつぶれるはずだつたのだと康有爲は述懷している（自編年譜）。有力な會員は黃遵憲・黃紹箕・汪康年・岑春煊・陳寶琛・陳三立などであつた（報學史一二一頁）。以上は十一月から一八九六年一月までのことである。

康有爲は舊曆十二月（一月十五日以後）には母の誕生日で歸國しなければならなかつたので、かねて會の主要目的の一つであ

つた「**强學報**」の發刊を急いで、一八九六年一月十二日に創刊號を出した（中國近代史事記。小野川書一八七頁）。これには光緒の年號とともに孔子紀年を掲げたので南京の連中はびつくりしたという。上海强學會の設立趣旨については「小野川書」一八七頁に詳しいので省略する。「强學報」は日刊紙で、木活字本の「中外紀聞」とは異り、この方は鉛活字で印刷された小冊であつた。紙代は無料だつた（報學史一二二頁）。報紙創刊後まもなく一月廿一日には前述の强學會封禁の上諭が下つたので、强學報はもちろん停刊した。

上海强學會が解散したとき會には七百餘兩の資金が殘つていた。梁啓超の「創辦時務報源委」（叢刊戊戌四・五二四頁）に會計上の詳しいいきさつが述べてある。それによると會が借りていた建物の家賃が一年分拂つてあつたので、半年分三百五十元を返してもらつた。また會の所藏の器物書籍などを賣つた金が二百餘元でき、結局全部合せて千二百兩以上が殘つた。この金がすなわち「時務報」の創立資金となつたわけである。

康有爲は强學報發刊に際して、前述のように自分は歸國しなければならないので武昌にいた汪康年に書翰を一度、電報を二度出して辭を低くして來援を請うた。汪はなかなか返事をよこさず、結局彼が上海に來た時には上海强學會は解散していたようである（梁「創辦時務報源委」）。したがつて汪康年は强學會に對しては有力な會員であつたというに止まり、實質的な協力はしなかつたものと思われる。前稿の「汪康年略傳」一九頁にも述べたとおり、この頃汪は武昌で張之洞の建てた自强書院の編輯と兩湖書院の教師をしていた。張之洞は汪康年が武昌を去ることを喜ばず、しきりに止めたにも抱らず結局職を捨てて上海に出てきたのである。彼のこの決意と、北京において「中外紀聞」執筆の仕事を失つた梁啓超と、二つのエネルギーが結集して半年後の時務報の創刊となつたということができる。

會員名一覽表　强學會の名簿は殘つていないので諸書に散見するものを集めてみた。正式會員と單なる應援者との區別などはなかなか分らないので、とりあえず全人名を羅列することにした。役職名はだいたい强學會當時のもの。

（　）は字。

〔中心人物〕

康有爲　祖詒（廣夏）　廣東南海　工部主事
梁啓超（卓如）　廣東新會　擧人
麥孟華（孺博）　廣東順德
陳　熾（次亮）　江西　戶部郎中、撰「庸書」
沈曾植（子培）　浙江嘉興　總理衙門章京
文廷式（芸閣）　江西萍鄉　翰林院侍讀學士
李提摩太（リチャード）　英國　廣學會督辦

〔會員・後援者〕

翁同龢（叔平）　江蘇常熟　軍機大臣、戶部尚書
翁斌孫（弢夫）　同　上　同龢從孫
李鴻藻（蘭孫、寄雲）　河北高陽　軍機大臣、禮部尚書
王文韶（夔石）　浙江仁和　直隸總督、北洋大臣
袁世凱（慰亭）　河南項城
孫家鼐（燮臣）　安徽壽縣　工部尚書
徐世昌（菊人）　河北天津　親袁世凱
汪大燮（伯唐）　浙江錢塘　內閣中書
楊銳（叔嶠、鈍叔）　四川綿竹　內閣中書、戊戌殉難
張元濟（菊生）　浙江海鹽　總理衙門章京
丁立鈞（叔衡）　江蘇丹徒　工部主事
沈曾桐（子封、紫封）　浙江嘉興　翰林院編修、沈子培兄弟
張　權（君主）　直隸南皮　擧人、張之洞子
曾廣鈞（重伯）　湖南湘鄉　翰林院編修、曾國藩孫
王會英（幼霞）　都察院給事中
洪良品（右丞）　湖北黃岡　戶科掌印給事中
蒯光典（禮卿）　安徽合肥　翰林院檢討
宋　慶（視三）　山東蓬萊　武將
聶士成（功亭）　安徽合肥　武將
程文炳（從周）　軍人
龍殿揚（覲臣）　軍人

〔上海强學會〕

汪康年（穰卿）　浙江錢塘　進士
黃遵憲（公度）　廣東嘉應　湖南按察使
張之洞（孝達）　直隸南皮　署兩江總督
梁鼎芬（星海）　廣東番禺　湖北按察使、張之洞幕友
劉坤一（峴莊）　湖南新寧　喪中
江　標（建霞）　浙江元和　翰林院編修

王之春（爵棠、芍棠）　湖南清泉　湖北布政使、撰「瀛海巵言」

陳三立（伯嚴）　江西義寧　吏部主事、陳寶箴子

張　謇（季直）　江蘇南通　翰林院修撰

譚嗣同（復生）　湖南瀏陽

左孝同（子異）　湖南湘陰　道員、左宗棠子

黃體芳（漱蘭）　浙江瑞安　通政使

黃紹箕（仲弢）　同　上　侍讀、體芳子

黃紹第（叔鏞、叔頌）　同　上　翰林院編修、體芳從子

周化鈞（沅帆）　湖南　吏部

沈瑜慶（愛滄）　福建侯官　道員

黎庶昌（莼齋）　四川遵義　道員

志　鈞（仲魯）　道員

喬樹楠（茂萱）　四川　部郎

岑春煊（雲階）　廣西西林

陳寶琛（伯潛）　福建閩縣

屠仁守（靜夫）　湖北孝感

〔好ましくない入會者〕

張孝謙（巽之）　河南商城　翰林院編修

丁玄鈞（淑衡）　據康自編年譜。恐即前出丁立鈞。

褚成博（孝通）　浙江餘杭　江西道御史、欲劾奏者

張仲炘（次冊）　湖北江夏

參考文獻略稱表

湯論叢　湯志鈞「戊戌變法史論叢」一九五七

七十年教育　丁致聘編「中國近七十年來教育記事」一九三五

叢刊戊戌　中國近代史資料叢刊「戊戌變法」一九五七

胡　書　胡濱「戊戌變法」一九五六

林近代史　林增平「中國近代史」一九五八

出版史料　張靜廬輯註「中國近代出版史料」

小野川書　小野川秀美「清末政治思想研究」一九六〇

報學史　才公振「中國報學史」一九五五　重刊本

政變記　梁啓超「戊戌政變記」一九五四　重刊本

文化人鑑　橋川時雄「中國文化人物總鑑」一九四〇

范近代史　范文瀾「中國近代史」上編第一分冊、一九五三　修訂八版

譚全集　「譚嗣同全集」一九五四

張年譜　許同莘「張文襄公年譜」一九四六
黄　傳　麥若鵬「黄遵憲傳」一九五七

註

① 戊戌變法時期の學會および報紙の事情については「湯論叢」の「戊戌變法時的學會和報刊」の章に詳しい。學堂設立については「七十年教育」五頁以下が年表的知識を與えてくれる。學會・學堂・報館の緣起や章程等の資料は「叢刊戊戌」第四冊の「學會等組織」の項がよく集めている。この中の梁啓超の「强學會封禁後之學會學堂報館」の一文（彼の「戊戌政變記」より引用）は學會・學堂名の一覽表を掲げている。

② 「胡書」三七頁、「林近代史」三六三頁。兩書とも汪康年の上海强學會入會については出典をあげていないが、張之洞の「上海强學會序」（康有爲代作）の附記を蔡爾康が一八九六年に書いており、その中に汪康年入會のことが記されている。（叢刊戊戌四・三八六頁）蔡爾康は廣學會の人、「中東戰紀本末」の編者、その經歷は不詳。

③ 「基督教文字播道事業談」「出版史料二編」所收。三三五頁註六。

④ 同上　註三。

⑤ 「小野川書」一八〇頁。

⑥ 同上　一八一頁。

⑦ 蔡爾康（註②）の文に「乙未（一八九五）六月間、京師有擬開報館之議、……時則廣學會督辦李君提摩太、方自滬走京師、日以新學之益、徧告達官貴人、……」とあり、六月は新暦の七八月にわたっている。また同じ文中に「丙申（一八九六）正月……是時李君自京返滬。」とある。正月は新暦の二、三月。

⑧ アジア歴史事典三巻一九八頁、菊池貴晴氏の「廣學會」の項による。

⑨ この邊の經緯は「康南海自編年譜」（「叢刊戊戌」四・一三〇頁）による。

⑩ 「蒞報界歡迎會演說詞」叢刊戊戌四・二五四頁。

⑪ 京報については「報學史」三三、四頁を見よ。北京の正陽門外に報房があり、日々の朝廷の文書類を印刷して一部十文で賣つた。木活字印刷の私設官報（日刊）といつたもの。

⑫ 「中外紀聞」の發行部數は、小野川書一八一頁に、康南海自編年譜によつて千部としておくとあるが、中外紀聞は梁啓超が主にやつていたのだから梁の記事を信用しておこうと思う。「政變記」一二六頁および註⑩演說。

⑬ 麥孟華には傳記がない。調べ得たことを列擧しておこう。一八七四―一九一五。字は孺博、筆名は曼珠、曼珠室主人、號は蟠庵。廣東省順德縣の人。康有爲門下では彼と潘若海とが詩名をもつて鳴つた。著は「蛻庵集」二巻がある（文化人鑑五〇六頁）。「范近代史」は、麥は康有爲の大門徒の一人、梁啓超と同等の地位にあり、康門中最頑固の一派で君權主義者だ（三二〇頁）としている。公車上書題名記や保國會の名簿にはむろん名を列ねている。一八九六年冬に廣東より上海に出て時務報の仕事を手傳つた（湯論叢二三一頁）。張伯楨の「張篁溪遺稿」の

中に「憶麥孺博先生」の一文がある。（叢刊戊戌四・二八二頁）。

⑭ 「報學史」一一三頁によれば、中國人の創めた新聞に漢口の「昭文新報」（一八七三發刊）上海の「匯報」（一八七四發刊）香港の「循環日報」（同上）上海の「新報」（一八七六發刊）廣州の「廣報」（一八八六發刊）があり、あとの四つはみな外國事情をよく知つた人々のつくる所だつたが、惜むらくは世間が未だ新聞を讀むことの重要さを知らなかつたとある。眞に報紙の機能を發揮したもの、特にそれが北京で發刊されたという點で「中外紀聞」の意義があつたわけである。

⑮ 張孝謙の經歷は不明。翰林院編修。康自編年譜によれば、當時軍機大臣の一人だつた李鴻藻の「得意門生」だつたので、その人物には疑問があつたが、沈曾植が推擧したのだという。この男がうるさいことを言つたり、したりして康有爲を困らせたことが年譜に記されている。

⑯ 「强學會叙」は「叢刊戊戌」四・三八四頁および「政變記」一二七頁所收。

⑰ 梁啓超が後年北京大學での觀迎演說會の話の中にこの世界地圖のことを面白く語つている。强學會が封禁された時に步軍統領（警察）が書籍や儀器とともに持ち去つたが、その後どうなつたか分らないと。（叢刊戊戌四・二五五頁）

⑱ 徐桐は保守派の中では評判のよかつた人物だつたが、極端な外人嫌いだつた。西太后に信任あり、光緒帝は彼の頑迷を嫌つた。（矢野仁一「清朝末史研究」七頁）

⑲ 「政變記」一一一頁の「烈宦寇連材傳」によると、文廷式が罰されたと同じ時、すなわち舊曆二月十七日に宦官の寇連材が斬罪に處せられているが、これは宦官の身分で西太后に、政を帝に返せという意見書を上つたかどで西太后の怒を買つたのであつて、强學會とは直接關係はない。因みに文廷式じしんはこの處分を受けるまえに、前年病に託して北京を出ていた（政變記六〇頁）。

⑳ 十日に一度集會したと「湯論叢」二二七頁にあるのは、會員がしだいに多くなつた時期、すなわち康有爲離京後あたりのことではないかと想像される。

㉑ 翁同龢の權力については矢野仁一「清朝末史研究」六頁に詳しい。西太后派の滿人軍機大臣剛毅がリチャードに語つた話に、今日帝に對して勢力のあるのは翁一人だけで、軍機大臣首席の禮親王も、總理衙門首席の恭親王も並んでいるだけだ、自分らは帝に對しては何の勢力もないといつている。また同じ主戰派の李鴻藻（軍機大臣）なども翁のこの帝と獨見する特權をひどく妬んでいたという（康自編年譜。「叢刊戊戌」四・一三三頁）。翁はこの特權を武器として西太后派の軍機大臣である孫毓汶・徐用儀を逐い出した（六月五日、十六日）のでついに西大后の怒りを買い、毓慶宮行走を罷免され帝と密談することができなくなつた（「政變記」五九頁）。

㉒ 張之洞が兩江總督兼江寧將軍に署せられたのは、「清季重要職官年表」（一九五九）によれば、光緒廿年十月五日（一八九四年十一月二日）から廿一年十一月十八日（一八九六年一月二日）までである。この間張之洞の原任の湖廣總督の職は湖北巡撫譚繼洵が兼署していた。

（一九六一・二・一二）

On Ch'iang-hsüeh-hui 强學會

—Biographical Notes on Wang K'ang-nien 汪康年—

Shigenobu Naitō

The westernized army that had cost Li Hung-chang 李鴻章 his fifteen years' labours proved a failure in the Sino-Japanese War, and this gave rise to a movement for institutional "reform," leading to the birth of an organization called Ch'iang-hsüeh-hui. On the other hand, in the early nineteenth century Protestant missionaries began to propagate their faith, and their efforts proved successful, at least, partly by employing medicine and education as their means. Timothy Richard was one of these missionaries. His activities were not limited to education but the enlightenment of the Chinese literati who were affiliated with the Society for the Diffusion of Christian and General Knowledge among the Chinese (Kuang-hsüeh-hui 廣學會) established in Shanghai in 1887. Ch'iang-hsüeh-hui was also set up by such young progressive scholars of south China as K'ang Yu-wei 康有爲 and Liang Ch'i-ch'ao 梁啓超 as well as progressive officials in Peking, and Timothy Richard played the role of adviser. Seeing that progressive movement would not succeed in the much conservative atomosphere of Peking, K'ang Yu-wei organized another Ch'iang-hsüeh-hui in Shanghai, but it was disbanded by order of the Empress Dowager and her clique after only a few months' existence. Peking's Ch'iang-hsüeh-hui survived as Kuan-shu-chü 官書局, while in Shanghai the movement revived in the form of a journal, Shih-wu-pao 時務報, started by K'ang Yu-wei six months after the dissolution of the society. The journal was continued for three years, and responsible for making a fourishing period of the movement.